

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.10, (2009. 12) ,p.7- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000010-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

タイトル	開催日	場所	研究・運営プログラム名	主催者	参加者
シンポジウム： 第120回 バイオサイコ シンポジウム	7月8日	三田キャンパス 研究室棟地下 1階会議室3	心理学研究室、 人間知性研究センター、 全体	渡辺茂	Kei Yamamoto (Institut de Neurobiologie Alfred Fessard CNRS Gif-sur- Yvette)
国際セミナー： 2009年度 Keio- Cambridge Joint Seminar	8月 11-13日	イギリス ケンブリッジ 大学	国際教育連携拠点	渡辺茂 ヴォルフガング・ エアトル	皆川泰代、増田早哉子、石井拓、 一方井祐子、大瀧翔
シンポジウム： 第2回 前野拠点主催 人間知性 シンポジウム	10月3日	日吉独立館 DB201	人間知性研究センター共催： 独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター 慶應義塾大学 グローバル COE プログラム 「幹細胞医学のための教育研究拠点」 「環境共生・安全システムデザインの 先導拠点」 「論理と感性の先端的教育研究拠点」 慶應義塾大学システムデザイン・ マネジメント研究所		川人 光男 (株式会社国際電気 通信基礎技術研究所 脳情報研 究所)、牛場 潤一 (塾内理工学 部生命情報学科)、藤井 直敬 (独 立行政法人理化学研究所 脳科 学総合研究センター)、荻原 直 道 (塾内理工学部機械工学科)、 大平 貴之 (塾内医学部脳神経外 科)、中野 泰志 (塾内経済学部)、 入来 篤史 (独立行政法人理化学 研究所 脳科学総合研究セン ター)、渡辺 茂 (脳と進化班)

研究員紹介



太田 (内田) 真理子 (非常勤研究員)

これまで私は、光トポグラフィや脳波、心拍などを同時計測し、様々な脳活動(睡眠中の循環器制御など)について研究してきました。GCOEのプロジェクトでは、これまでに培ってきた同時計測技術を生かし、驚愕反応やその抑制に関わる脳機能を研究していきます。

ここで驚愕反応とは、例えば突然大きな音を聴かせた時に心拍数変動やまばたきとして表出する反応のことを指します。近年では、こうし

た反応が過剰なケースとして、注意欠陥多動性障害、強迫神経症、自閉症といった精神疾患との関連が指摘されています。驚愕反応は主に前頭葉でコントロールされる事が知られていて、その前頭葉が“感性”を支える脳部位(扁桃核、海馬、視床下部など)を適度に抑制することで、ビクッとしてしまうような緊急の場面でも論理的思考にもとづく意思決定を速やかに行うことができると考えられます。GCOEでは、特に発達の観点から驚愕反応とそれに関与する脳機能を調べ、感性と論理のバランスがうまくとれる脳の状態というのが、いつごろから出来上がっていくのかを明らかにしたいと思っています。



福島宏器 (GCOE 研究協力者)

私は平成20年度より学振特別研究員として、脳と進化班の中で研究協力をさせていただいています。脳波や脈波・心電図、fMRIなどによる脳と身体の生理的計測によって、他人の感情を理解する認知メカニズムを探っています。我々の感情が生まれるとき、ドキ

ドキする、汗をかく、胃が痛くなるなど、身体の反応が大きな役割をはたしています。このような身体反応は、たとえ意識されなくても、

日常の認知活動や社会活動に大きな影響を与えています。たとえば我々が先に行った実験では、他人の感情の判断課題をしている実験参加者の脳波と心拍を同時に計測し、比較課題を行っている場合と比較しました。その結果、心拍に同期した脳活動が、他者理解を行う最中に変動していることが観察されました。また、その神経活動の強さは、他人への共感のしやすさと関連することも示唆されました。こうした結果を元に、他人の感情の理解と自分の感情の処理がいかに脳と心の中で結びついているかということを検討しています。こうした「感情的知性」の研究から、人間の「感性」の解明に少しでも貢献できればと思っています。



宮田裕光 (GCOE 研究協力者)

平成21年度より日本学術振興会特別研究員PDとして渡辺茂教授研究室でお世話になっております。宮田裕光です。昨年度までは京都大学文学研究科心理学研究室に大学院生として所属し、ハトやkea(ミヤマオウム)といった鳥類や、ヒト幼児を対象とした認知実

験をおこなってまいりました。問題解決行動をみちびく内的な情報処理過程を、コンピュータ画面上での迷路課題や巡回セールスマン問題、

鍵開け課題などにおいて種々の実験操作を加えることで、行動的に検討してきました。一連の研究では、多様な系統位置や発達段階にある種に共通する問題解決の内的過程がある可能性とともに、そうした能力には個別の生態による制約もある可能性が示唆されました。慶應義塾大学と本GCOE拠点にお世話になってからは、こうした認知過程を神経基盤の観点からも検討する必要があると考え、ヒトの成人や幼児を対象にNIRSやfMRIを用いて前頭葉機能を検討する研究を進めつつあるところです。長期的には、思考と意識、感性や直覚とのかかわりなど、多面的な問題意識を持って研究を進めていければと構想しているところです。今後ともよろしくお願いたします。